



熊谷 信孝さん (上野)

世話人会の中で最も植物に詳しく「貴・福智山地の自然と植物」などの著書でも有名。同会会長。



井上 孝生さん (赤池)

世話人会の前会長。発見当初から虎尾桜の保護活動と周辺整備に、自ら率先して携わっている。



↑周囲を杉林に囲まれた湿度の高い状況で、虎尾桜の幹には多くのシダやコケが着生。幹と根の北側半分は高さ2メートルまで腐食し、枯死した状態だった。幹の内部は最大内径80cmが空洞化、生存部と枯死部の間には亀裂が入って分離していた。2〜3年で枯死しかねない危険な状況だった。



↑福智山の中腹の谷間に顔をのぞかせる虎尾桜。開花時に目を凝らせば、遠くからでも確認できる。



もう一つの桜物語



源平桜

世話人会が平成6年に発見したエドヒガンの一対。花の色が赤と白であることから、源氏と平家の旗の色にちなんで「源平桜」と命名された。虎尾桜から徒歩40分、500メートル離れたところにある。史実では源氏が白で、平家が赤の旗色だが「争いごとのない世であって欲しい」との願いを込め、赤い花の木に「源氏桜」、白い花の木に「平家桜」と、色を取り替えた名が付けられている。写真は源氏桜。

「桜の様子はどうもおかしい」。翌年、巨桜に再会した二人は虎尾桜の異変に気づきます。幹のように大きな三本の枝の一本が、腐食して落ちていたのです。そこで、当時の赤池町文化連盟会長・久原弘さんに相談。「町で一番植物に詳しいから」と紹介されたのが、熊谷信孝さん（上野・下小路）でした。地元上野出身の熊谷さんは、かつて幼いころ、祖父に連れられて福智山を登ったときに虎尾桜と対面していました。まだ植林がない当時、桜の迫力に圧倒された記憶は脳裏に焼き付いたまま。その存在は知っていました。が、てっきり「山桜」だと思っていた熊谷さんは、二人から手渡された花を凶鑑と見比べて息をのみまします。その花は紛れもなく、県内でも珍しい桜とされるエドヒガンのものでした。「あの虎尾桜が…」。

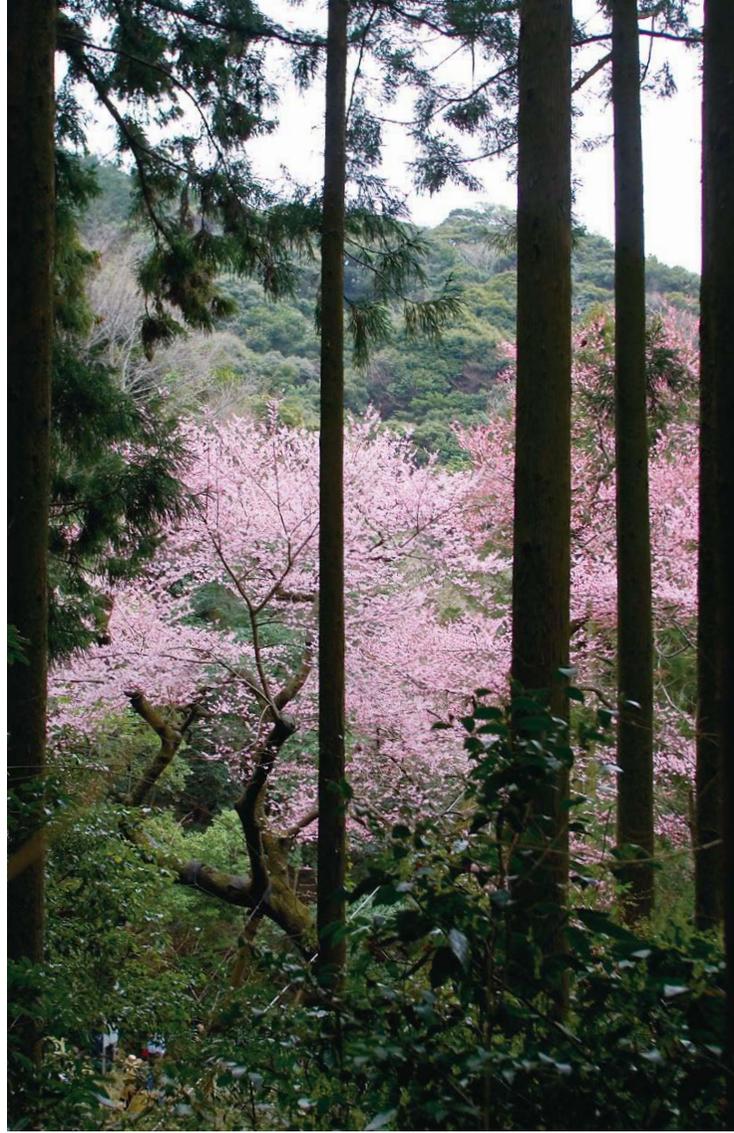
早速、熊谷さんは胸を躍らせ調査に向かいます。しかし、そこまで虎尾桜の姿にがく然としたのです。桜は本来、陽光が十分に当たる場所で生育する陽樹。それが杉林に日光をさえぎられ、湿度も高い劣悪な状況で立っていたのです。幹にはコケやシダがびっしりとこびりつき、根元は腐れが進み、今にも枯死しそうなほど弱っていました。「これは、保たんかもしれん」。触れた枝がポトリと落ちたとき、熊谷さんは山中でひっそりとたたずむ霊木を前に、驚きと戸惑いを隠せませんでした。



小林 省吾さん (赤池)

虎尾桜を心配する世話会の発起人。会では事務局長を務め、PR活動も積極的に行っている。

枯死寸前のエドヒガン



↑杉林の中で咲き誇っていた虎尾桜。花の美しさに反し、根元では予想以上に腐れが進んでいた。

傷ついた巨桜

衝動

山深い谷で、人知れず咲いていた伝説の桜。傷つきながらも鮮烈な美しさを放っていました。その巨桜に出会った瞬間から、物語は始まりました。

眼前にそびえる伝説の桜

春になると緑の山肌、鮮やかなピンクの点が浮かびます。「山奥に地元の人にあげられた伝説の桜がある。古老から往事の話を聞いていた小林省吾さん（赤池・松本）、以前からその存在が気になりつつも、思い立つことができませんでした。遠目で桜を確認できても、山の谷間で見つけ出すにはそれなりの準備と時間が必要。気が付けば桜は散り、ピンクの点が消えてしまう。毎年その繰り返しで、思いは募るばかりでした。そんな虎尾桜の物語が始まったのは、今からおよそ十八年前の平成元年。小林さんが友人の井上孝生さん（赤池・桜NT）に虎尾桜の話を持ちかけたのがきっかけでした。井上さんは早速、妻・富恵さんと道なき道を登っていきます。何度か失敗しながらも、うっそうとしたやぶをかき分け、わずかに見える濃いピンクを頼りに、その方向へと近づいていきました。

「あのときの感動は忘れられませんね。杉林の中で急に目の前が明るくなって、桜の前に立つたとき、思わず声を上げましたよ。一目で心奪われたという感じでしょうか」と井上さん。うねるような太い幹からしなやかな枝が伸び、可憐な緋色の花を咲かせる巨大な桜。ただ見上げて、しばらく立ちつくしたといいます。後日、小林さんと井上さんは、登山道からそれて小川を渡り、二百メートルほど入った谷間の南斜面に虎尾桜があることを確認しました。